

### 【エジプトでの研修生活】

私は、元々中東外交を志して外務省に入った訳ではありません。入省直前の面接の際、人事課長から「君、アラビア語を研修しないか?」と言われ、これも人生だな、と思って、しばし感慨にふけておりました。すると、「アラビア語が嫌なの?」、「中東は面白いよ。」などと、盛んに人事課長が話しかけるので、それを右の耳から左の耳に抜けるような感じで聞いておりました。このようにして、全くアラブに関して経験も勉強をしたこともなく、正直言って興味もなかった私が、中東・アラブに関わりを持つようになりました。

三十数年前ですから海外旅行も一般的ではなく、外務省アラビア語研修生の私にとってエジプトが最初の外国でした。当時はまだ飛んでいた JAL の南回り便で、カイロ空港に夜中の 1 時頃に降り立ちました。最初の印象は、至るところにたむろする人たちが怪しく思え、『アリババと 40 人の盗賊』さながらのすごいところに来てしまったと心細く思ったのを覚えています。

エジプトでの生活は、最初からカルチャーショックの連続でした。滞在したペンション・ザマーレクであてがわれたのは、冷房もない小さな部屋でした。7 月に着任し、連日 40 度の暑さと格闘しながら、一番暑い時は寝つけないので、水シャワーを浴び、そのままベッドに入っても 1、2 時間くらいで完全に乾き、またシャワーを浴びる、そのような生活でした。秋からは、アラビア語の勉強のため、カイロ・アメリカン大学に通い始め、滞在先もザマーレクのブラジル通り 12 番地のアパートの下宿に移りました。

下宿した一家のオーナーの名前はクレオパトラでした。クレオパトラという名前の方が本当に存在するとは思っていませんでしたので、クレオパトラか・・・どんな人なのだろうかと興味津々、楽しい生活になるのでは、と思ってまいりますと、典型的なエジプトのおばさんでした。私のクレオパトラのイメージは、エリザベス・テラーの映画「クレオパトラ」でしたので、そのイメージは、一変に崩れてしまいました。クレオパトラおばさんは離婚の慰謝料としてそのアパートをもらったそうです。イスラーム法では 4 人の妻を持つことが認められ、結婚する時には、離婚時の慰謝料を決めておきます。おばさんによれば、若い 2 番目の奥さんをもろることが許せない、ということが離婚の理由でした。こうしたムスリム社会の現実を目の当たりにして、私の下宿生活がスタートし、そこでエジプト人の生活をありのまま体験できました。

エジプト社会は、密接に家族、親戚、友人が結びついた社会です。私の下宿にも毎日とは言いませんが、毎週必ず、親戚やら友人やら、入れ替わり立ち代わり訪問者がやってきます。また、エジプト人はお祭り好きです。ラマダン月というのは、厳しい断食の月というよりむしろお祭りです。午後、一旦寝たりしますが、日没後のイフタルの食事を済ませると、夜中まで親戚、友人を訪問したり、晩餐があったりします。私も一度ならず夜中の 2 時、3 時くらいに、突然起こされ、「これから食事だよ。」と言われ、家族とご馳走を一緒に食べることになりました。最初は、「なんだ?なんだ?」と思いましたが、ラマダン月はお祭りだと身をもって理解しました。

苦勞したのは、シラミやナンキン虫でした。特にナンキン虫は、噛まれると近接した二つずつの噛み跡が 1 週間くらい消えません。ある時、すごく噛まれ、おばさんに「虫に噛まれて痒いので、薬ない?」と尋ねますと、「それは蕁麻疹。私の家に虫はいない」と言われてしまいました。私のアラビア語も拙かったものですから、言い争いに負けて、蕁麻疹の薬を飲まされる羽目になりました。その後気付いたのは、メイドが来た日に噛まれるのです。メイドがナンキン虫をいわば体に飼っていて、部屋を掃除している間に新たな臭いに誘われ移住してくるのです。それからは、メイドが来るたびに殺虫剤を部屋中バルサン状態にしていました。国際電話はタハリール中央郵便電信局に行きまして申し込むのですが、夜中の 1 時、2 時に行かないと長蛇の列なのであまり行きませんでした。ある意味、下宿生活は隔離していましたが、それだけドブクリとエジプトの生活に浸ったので、エジプト人を肌で理解することができたと思います。

よく言われますが、エジプト人が日常話している言葉と、テレビのニュースなどで話している言葉、即ち、クラシックなアラビア語とは違います。自分が大学で勉強している言葉と全然違う言葉を家族が話していること、家族の話が理解できないこと、そのギャップに苛まれました。正直、話し言葉に自信のないままエジプトを去り、30年後に大使として戻って来ました。赴任に当たり、アラビスト大使として、エジプト人相手のインタビューやスピーチは英語や日本語では行わないと固く決意し、必ずアラビア語で行なっています。冷や汗の連続の2年半が過ぎましたが、次第に慣れて来たのと、長い外交官生活で心臓に毛が生えてきているので、何とかこなしております。

### 【エジプトの変わらないところ・変わったところ】

30年ぶりの赴任ということで「エジプトの何が変わりましたか？」逆にいうと、「何が変わっていませんか？」とよく質問されます。私の住んでいたザマーレクは、町並みはそれほど変わっていません。変わったと言えば、これほど郊外に立派なゴルフ場ができるとは思っていませんでした。昔はメナ・ハウスとザマーレクに申し訳程度にあっただけでした。今やゴルフ場の中に、何億円もする豪邸が建ち並び、街中にはすばらしいショッピングモールができています。30年前には地下鉄も走っておらず、日本の自動車工場などありません。東芝、日立も当地では製造していませんでした。日本食レストランも3件だけでした。吉村作治先生がオーナーのザマーレクにある東京レストラン、空手の指導者として有名な岡本さんのレストラン、小池百合子都知事のお父さんが経営する難波レストラン、日本食が恋しくなると、この3軒を交互に通いました。それが今や、寿司をだす店はカイロに50軒以上あります。

また、エジプト人の変わらない点はホスピタリティです。30年前の下宿生活の際にも感じましたが、エジプト人は誰に対してもホスピタリティに溢れています。どこのアラブ諸国にもある程度ありますが、エジプト人は特段、長けていると思います。

「エジプト人は血が軽い（ダンモ・ハフィーフ）」と言いますが、最初は意味がわかりませんでした。この表現には、快活や明るいという意味もありますが、私が一番しっくりくる訳は「ノリが良い」です。人と話をする時に話を合わせようとします。快活に振舞い、人間関係も大切にします。逆にアラブ人には血が重い人（ダンモ・ティイール）もいます。イラク人など東アラブの人々のことを対比して言います。例えば、外国人からアラビア語で親しく話しかけられると、エジプト人は心から喜ぶのですが、血が重い人は、「なぜ、アラビア語で話しかけてきたのか。」と警戒心を抱きます。歴史的にメソポタミアなどの地域は、東からも西からも攻め込まれ、蹂躪される歴史が繰り返されてきたので、よそ者に簡単に慣れ親しもうとはしません。その人の氏素性やどういう意図があり、何をしたいのかわからないと、心も開かないわけです。そういうことをアラブ人同士でも感じるのも、このような表現が生まれたのではないかと思います。エジプトは地域の大国としての歴史も長く、よそ者に対してもホスピタリティに溢れ、優しく接してくれます。

### 【エジプト人の気質、特徴】

まず強調したいのは、エジプト人はナイルの民です。ファラオの時代から、いやそれ以前からナイル川と共に生きてきました。ナイル・デルタが地理的に成立するのは1万年以上も前ですが、飛行機から見るとデルタからルクソール、アスワンまで、ナイル川沿いに緑が広がっているのが見えます。ナイル川沿いの至るところに遺跡が残っており、ナイル川と共に文明が発展して来たことがわかります。ファラオの時代の人と、現代のエジプト人とは断絶があるとも言われますが、それは違います。このことはエジプト人地理学者であるガマール・ヒムダーンの説く『重層的な個性』により説明することができます。

ファラオの時代が終わり、そこにキリスト教が入ってきます。キリスト教の時代の後、7世紀にイスラーム教とアラブ人が入ってきます。ファラオの宗教や文化は、キリスト教、イスラームと次々に塗り替えられて、最終的に完全にイスラーム化、アラブ化したかという、そうではありません。ア

ラビア半島のアラブ人は、最初は征服するために入って来ますが、むしろエジプトに同化し受容されたのです。逆に、旧来のエジプト人も、アラビア語とアラブの文化、そして宗教を受け入れるわけです。文化が完全に塗り変わっていったわけではなく、それらが重層的に存在する、これを重層的個性と言います。

地理的には、シナイ半島を通してアラビア半島からも、シリアなど西アジアからも文化が入って来ました。例えば、アラブ人がダマスカスを中心としてウマイヤ朝というアラブ帝国を作り、エジプトを征服した歴史があります。また、アスワンなど上エジプトはアフリカの影響が濃く、アフリカとしてのエジプトです。近代に入ると、ヨーロッパとの関係が強くなります。特にナポレオンのエジプト征服以来、オスマン帝国から半ば独立したムハンマド・アリー王朝が富国強兵政策を採り、ヨーロッパの制度や技術を取り入れて、近代化を推進しました。他方、それ以前もヨーロッパとは断絶していたわけではありません。ヘレニズム時代にも、更に遡ってファラオの時代からヨーロッパとの関係は深いものがありました。エジプトは、欧州的要素、アフリカ的要素、アジア的要素が入り混じって成立していると、ガマール・ヒムダーンなど地理学者は理解しています。

東大の長澤先生の著書「エジプトの自画像」の中で、レバノン人のハリーム・バラカートという社会学者の学説が紹介されています。彼は人間社会を、モザイク社会、それと相対する同質性社会、そしてその中間の領域に多元社会があると分類します。非常にわかりやすいと私は思っています。モザイク社会を代表するのはレバノンです。レバノンには、スンニー派、シーア派、ドゥルーズ（ドゥルーズはイスラームではないとも言われていますが）など、様々なイスラーム系の宗派が存在しています。キリスト教についても、アルメニア正教、ギリシャ正教、カソリック、レバノンの主流のマロナイト派等数多くの宗派が存在しています。人種というより文化、宗教のつぼです。レバノンは、まさにモザイク社会であり、基本的には互いに交わらず、国全体が渾然一体とならない形で、人々は自らのコミュニティ、文化を何百年も守ってきました。それだけ個々のコミュニティの紐帯、結びつきが強いのです。

その対極にあるのが同質性社会です。エジプト、チュニジア、リビアがその例として挙げられています。エジプトには多様な人が流入しました。アラブ人だけではなく、ウマイヤ朝、アッバース朝などの帝国の時代には、ユダヤ人、イラン人、トルコ人始め様々な民族、文化が流入しました。それらを全部飲み込み、エジプト固有の社会が形成されているのです。エジプト人である前に、キリスト教徒、ムスリムであると考える人もいるでしょうが、自分はエジプト人であるという強いアイデンティティを持つ人が多い、という点がエジプトという同質性社会の特徴です。

その中間にあるのが多元社会です。例えばイラクやシリアです。イラクでは、スンニー派、シーア派、クルドの主要三派が互いに交わらず、そういう意味では多元的ですが、モザイク社会ほどバラバラではなく、連邦的な国を作っています。シリアも、スンニー派とアラウィー派による二元的な社会です。もっとも国内には、少数ですがクルド人、ユダヤ人もいれば、様々なキリスト教徒もいます。

この分類からエジプトの特色が分かってきます。即ち、次々に異文化を飲み込んできた社会だということです。その根本、中心にあるのが、ナイル川です。ナイルの恵みは 5 千年以上にわたる文明を支えて来ました。洪水が起きることを前提にした農業が何千年も続きました。洪水後に種を捲く一毛作です。洪水の時期、ナイル川は 1 m、2 m と水位が上がり、デルタ地域全体が冠水します。秋口に、冠水した土地に冬小麦などの作物を植えて、農閑期にはピラミッドを作りました。灌漑農業の専門家によれば、エジプトの農業は一毛作であったが故に、持続可能な農業だったようです。メソポタミア文明やインダス文明が滅びた理由の一つは多毛作にあるとも言われています。エジプトは一毛作で、かつ生産性が極めて高く、流入した全ての人を養えました。侵略者は、攻めて、奪って、帰還するというヒットアンドランではなく、そのまま住み着く人々も多かったのです。

【エジプト人のアイデンティティ】

そもそもアイデンティティというのは、帰属する先が、一個人から始まり、家族、地域コミュニティと段階的に広がっていきます。近代になると、国家がそれを包摂します。そして、国家を超えるアイデンティティの帰属先は、アラビア語を話すという文化を共有するアラブ民族であり、さらに、より大きなイスラーム共同体、即ちムスリム社会全体となります。貴方はアイデンティティをどこに感じますか、とイスラーム諸国で尋ねた時、イスラームと答える人が多いのは、イスラーム教成立の初期から「ウンマ・イスラミーヤ」（イスラーム共同体と訳される）という共同体意識が形成されていたことにも理由があります。イスラーム過激主義者はそれしかないと思っていますが、もちろんムスリムが皆そう思っている訳ではありません。

また、アラブ人の中には、共通の言語、文化を持つアラブこそ自分のアイデンティティであると感じる人もいます。ナセル大統領の時代には、ポストコロニアリズムの一環としてアラブ社会主義やアラブ・ナショナリズムが植民地からの独立を主導する思想として登場し、「ウンマ・アラビーヤ」（アラブ共同体）という考えも喧伝されました。しかし、今や、アラブにアイデンティティを託す人は減って来ているのではないのでしょうか。第二次世界大戦後、イスラエルに対してアラブ諸国は協力して戦いましたが、その中東戦争に負け続け、パレスチナ問題についても未だ解決の糸口がない無力感があり、域内の問題に関するアラブ諸国の協力が希薄になっているのも原因と思います。

一方、中東において国家にアイデンティティを託す人は、それほど多くありません。ネーション・ステートと言われる二度の世界大戦後の国家は、英仏など列強が国境を勝手に線引きして作られたものです。シリアやイラクはその典型で、自分はシリア人だ、イラク人だ、というアイデンティティが元々強いわけではありません。イラク人という前に、自分はスンニー派、シーア派だという強いアイデンティティがありますし、それも昨今の混乱の中では、一族郎党、家族だけ生き残れば良い、という人たちも多くなり、国家への帰属意識はどんどん縮んできています。その中で、国民としてのアイデンティティが自然な形で維持されている点では、エジプトが卓越しています。

エジプト人気質の中で、個人主義で団結力がない、ダメ元で色々要求する、人懐っこく人間関係にウエット、などいろいろ言われます。その中でも特徴的なものは、「エジプト人は、祖国エジプトが大好きで、誇りを持っている」ということです。そしてエジプト人は、そのような気持ちが自然に沸き起こるような中で生まれ育ってきているのです。また、5千年という最古の歴史を有する国としてのプライドも高く、金持ちのサウジにも先進国にもどんな国にもバカにされないぞという意識があるのです。

### 【エジプト社会の問題、課題】

次にエジプト社会の問題や未来に向けての課題をお話しします。まず、数字を見て下さい。エジプト 9%、イエメン 11%、パレスチナ 14%、ヨルダン 29%、リビア 14%、アラブ首長国連邦 49%。何の割合か分かりますか？これは 2010 年のギャラップというアメリカの世論調査会社の数字です。ちょうど、2011 年の『アラブの春』直前にまとめられた数字です。

私は、エジプト大使の発令を受ける直前まで、5 年間早稲田大学で中東地域情勢を教えていましたが、どのように 2011 年の『アラブの春』を説明するか悩みました。当時、出張でエジプトに来る機会もなく、現地情勢は日々の報道で知る他なかったのですが、たまたまネットでこのギャラップ調査にたどり着きました。その調査によれば、エジプト経済は、2006 年から 2010 年にかけて拡大し、6、7%の経済成長を続けていましたが、逆に人々の生活の満足度は下がっていたのです。

ギャラップ社が行ったのは単純な調査です。苦しんでいる、(Struggling)、困っている、(Suffering)、頑張っている、即ち、まあまあ満足している (Striving)、この三つのカテゴリーからの選択で、これは、満足している人々の割合の数字です。驚きなのは、経済が成長し明らかに経済状況が良くなっているエジプトがパレスチナ、リビア、イエメンなどの問題の大きい国よりも低いことです。トヨタや日産などの工場がエジプトに進出したのもこの時期ですし、ムバーラク大統領の

息子を中心に進める改革に乗ってエジプトのマクロ経済は最高潮に達していました。その時になぜ満足度が落ちていったのでしょうか。

「清く、貧しく、美しく」という日本映画がありましたが、みんなが貧しいとみんな仲良く暮らすことができます。お隣さんに「お醤油ない?」、「お味噌切らしちゃったから頂戴!」といった暮らしぶりが、昔の日本の長屋にはありました。今の日本にはなくなりましたが、エジプトでは田舎に行けば行くほど、かつての日本のような生活が長いこと続いてきました。他方、都市部では良い生活をする人が増えました。田舎でも湾岸への出稼ぎで、御殿が建てられています。周りに裕福な人が増えると、人間の性でジェラシーが生まれます。さらに言うと、貧困層の満足度はそもそも低いのですが、富裕層でさえもというか、金持ちであればあるほど欲深く「あいつ、あんなにいい思いをしているのか。」といった意識が出てきます。こうして満足度はますます下がって行きました。革命の発火点のチュニジアでも統計上同様のことが確認されています。つまり『アラブの春』は起こるべくして起きたとも言えます。一つの些細なきっかけから、民衆が国を超えて連鎖的に過激に反応し、革命にまで至ったのは、社会の中に不満足感がマグマのように溜まっていたからでしょう。

### 【革命後のエジプト経済、社会の現状】

エジプトは、一旦は民衆の力で政権を打倒したのですが、再び軍産複合体の支配が戻ってきて、非常に抑圧的になってきていると言われていています。このような社会変化の中で、一番重要なポイントだと私が思っているのは、必ずしも軍の政治、経済への関与ではなく、根本的な経済、社会の構造がどれだけ変化してきているのか、いないのかという点です。

わずか5、6年のことではなく、もう少し長いスパンで見ますと、先ほど申し上げたナイルの民、ナイル川の恵みの中で生きてきたエジプトは今でも変わらないわけです。近代、ムハンマド・アリー王朝がどうして明治維新に先駆け、発展の道筋を築いたのか。それは英国綿産業への綿花の供給地になったことが大きな要因です。19世紀半ばから20世紀初頭まで、綿花がエジプトの輸出に占める割合は8割を超えました。まさにエジプトがイギリスの産業革命、織物産業を支えました。エジプトの綿花生産において、革新的な品種改良が行われ、大量生産に成功し、プランテーションが次々にできました。アバディン宮殿始め、市内の古い立派な建物は全て綿花の売り上げで作られたと言っても過言ではありません。近代のエジプトで成立した構図、即ち原材料を輸出して利益をあげ、工業製品等を輸入し、軍事、経済などの支出を支えるというヨーロッパとの関係、構造が今も変わっていないのです。

言い換えれば、地場の産業が発展していないことに問題があります。現在、日本の家電メーカーや自動車メーカーの工場がエジプトに進出していますが、これが起爆剤になって、産業、経済構造が変わるかという点、その道筋はできていません。多くの労働者が未だに農業に従事し、工業労働者の質も低く、製造業もノックダウン生産しかできません。アジア諸国の成長モデルのように、日本など先進国から技術を移転し、自ら生産し、自らの技術で工業生産を伸ばしていくという形の産業振興が必要で

です。ムバーラク後期には新自由主義による自由な経済環境が整備され、製造業も導入されましたが、地道な重工業、軽工業というより、むしろ ICT や通信に力が傾けられました。一方、日本は、明治維新以来、絹織物から始まり、軽工業から重工業に、更に車や家電の製造へと移行し発展してきました。このようなモデルをキャッチアップして中国も ASEAN も発展してきました。エジプトは、ヨーロッパとの旧宗主国対被植民地の経済構造が基本的に変わっていないので、地道な地場の産業育成こそ必要であり、中長期を見据えて産業構造改革を進めていかななくてはなりません。

ヨーロッパの罪は大きいと思います。欧州企業は何十年エジプトでビジネスを行っているのでしょうか。製品を売っているだけ、あるいは現地製造はしても技術を移転しない。イギリスは最も長くエジプトに関わってきた国ですが、産業振興には貢献していません。ちょっと口が滑りすぎましたが、

これが現状です。EU と過早に FTA を結んだのも間違いでしょう、FTA によってかえって産業構造の固定化が進み、いつまでたっても原料供給基地という立ち位置から抜け出せません。オレンジをいくらヨーロッパに売っても、エジプト経済へのインパクトはありません。食品加工産業や、日本と言われるところの「6次産業」の振興が必要でしょう。即ち、農業などの一次産業、それを加工する二次産業、さらに消費者に届ける三次産業、これらが有機的に連携するような産業が起きて初めて産業構造改革が進展し、国際競争力を高めることができます。エジプトの農業は極めて生産性が高く、ナイルの民を数千年にわたって養ってきました。自然災害もなく、尽きることないナイルの水、溢れる太陽。エジプトは、このような恵まれた土地に安住し、多少の石油・ガスなどに頼りきり、中産階級を育て、産業構造を転換する努力を怠ってきたのです。実際、ナセル大統領の時代、途上国の中でエジプトが鉄鋼産業や造船産業などの産業振興に一早く手をつけていたにも関わらず、産業の発展には遅れをとりました。

#### 【日本の教育分野の対エジプト協力、結語】

日本は、「教育こそ国の発展の基礎である。」という考えに基づき、E-JUST（エジプト日本科学技術大学）や EJEP（エジプト日本教育パートナーシップ）という枠組での協力を実施しています。その一環として日本式教育のモデル校も設立する予定です。日本が戦後経済発展する時、NHK の朝ドラにもあるように、集団就職で、多くの若者たちが東北など地方から出てきて、工場などで働いていました。このような若者を訓練し、産業を支えていくということがエジプトではうまく機能していません。中国は「自分たちに任せれば何でもできますよ。その代わり中国人労働者を連れて来たい。」という交渉をしています。エジプトにして見れば、多くの人が失業しているのに、なぜ中国人労働者を連れて来る必要があるのかと思うわけです。

エジプト人を一から訓練し、育てるのは大変です。他方、エジプトの若者にポテンシャルがないかという点、日本のメーカーを含め、様々なビジネス関係者が、エジプトは非常にポテンシャルの高い国であると認めています。但し、初等教育から高等教育まで、全ての側面の教育の改革、教育のシステム改革をしなければ、ご説明したような産業構造改革が実現することはなかなかできないと思っています。教育分野の協力は始めたばかりですが、粘りつよく協力を行い、少しでも二国間関係の強化と共に、エジプトの発展に寄与できればと思います。とりとめない話となりましたが、以上とさせていただきます。

（以上）